

「エコ・ハウスたかねざわ」学習プログラム		分野	植物と暮らし	プログラム No	自然	2
対象	小学3年生以上	場所	野外及び室内	期間	春から秋まで	
プログラム作成年月	平成17年2月	訂正年月	平成 年 月	訂正回数	回	
プログラム名	藍を育てる・藍の生葉染めを体験する。					
<p>&lt;プログラムの目的&gt;(学習のねらい)</p> <p>○藍を種から育てることにより、植物の成長に関心をもてる。</p> <p>○藍の葉を使って生葉染めを行ない、自然の色を体感する。</p> <p>○日本人の生活と藍の関係を調べることで、自然の植物と昔の暮らしへの関心が深まる。</p> <p>草木染めで青色が出せるのは「藍染め」だけです。日本人は江戸時代の初めからこの「青」が大好きで、着物類や座布団、のれん等のいろいろな製品につかわれました。外国人はこの「青」にあふれた日本を見て、藍の青を“ジャパングルーン”と名付けたそうです。小泉八雲も日本は「青のあふれる国」とその印象を書いています。もしかしたらサッカー日本代表のカラーもこの日本人の「青」好きからきたのかもしれませんがね。ジーパンも元々はインド藍で染めていたそうです。</p> <p>このプログラムは、藍を育てて、藍染めを体験することによって、その色の美しさを知ってもらいます。そこから自然の豊かさや、自然と一体となった人々の生活を感じることで心をはぐくみます。</p>						

## すすめ方 その1. 藍を育てる

対象: 全学年

### 1. 藍の種をまく

- 日本で藍染めに使われているのは、タデ藍(タデ科)ですが、藍草はいくつも種類があり、世界中にその仲間があります。身近には、ソバや雑草のアカマンマ(イヌタデ)を良く見ると思います。まく時期は暖かくなればOKです。エコ・ハウスでは昨年3月末にまきましたが、無事に育ちました。
- 種をまくには、まく1週間前に土に石灰をまいて耕しておきます。
- その畑に直接種をまきますが、小さい種ですのでたくさんまいておきます。その上から土をかぶせ、たっぷり水をあげてください。
- 1~2週間で芽が出てきますが、雑草の芽と見分けがつきにくいので、区別がつくまではそのままでも良いでしょう。
- 苗がこんでいるところは2cm四方2~3本にしてあとは抜いてしまいます。ぬいた苗はポット(鉢)植えにできます。

### 2. 藍を育てる

- 藍を育てるには水が欠かせません。十分水をあげてください。
- 藍は強い植物ですので、自力でどんどん大きくなってきます。



### 3. 藍の葉が育ちました。

○6月末頃から、藍の葉がたくさん生えてきます。この葉を藍染めに使います。

○7月初めの頃になりましたら葉を刈り取ります。土ぎわ2～3cmを残して切り取ります。藍の葉は摘み取るというより、刈るという方がふさわしいほどです。この時期(7～8月)の朝取りの藍の葉が一番美しく染まります。

○葉を一枚手で取って少ししごいてください。緑の葉なのに手に青い色がつきます。これが藍の葉です。

### 4. まだまだ育ちます。

○刈ってもまだわき芽が出てきますので、9月に入ってもまた葉を刈り取ることができます。

### 5. 花が咲きました。

○小さな白い花が咲きました。花がさいてしまうと藍の色がきれいに染まりません。

### 6. 実を収穫します。

○花はそのままにしておきますと茶色の実になります。その実をしごいて取り、1日乾燥させてビニール袋に入れて冷蔵庫で保管します。来年用に取っておきましょう。

実は自然に土に落ちているので、来年も自然に生えてきますが、できるだけ藍は連作しない方が良いでしょう。

### 【工夫・留意点】

●「タデ食う虫もすきずき」と言われるくらい、タデは食べるとにがい植物ですので、あまり虫はつきません。ただアブラムシがつくことがあります。手で取るか竹酢液で退治しましょう。アブラムシが葉につくと、白いあとがつきますが、洗えばだいじょうぶです。

●一番美しく藍が染まるのは7～8月。秋に花が咲いてしまふときれいな藍色にならないのですが、エコ・ハウスでは11月始めまで、生藍染めを楽しめました。学校が夏休みに入ってしまつて、生藍染めができなくても、秋の終わりまで体験授業は可能です。



## すすめ方 その2. 藍の生葉染め

対象:3年生以上

所要時間:45分～ 実施時期:7月始め～10月末 キーワード:自然の恵み・草木染め

## 1. 準備するもの

藍の生葉	使用する直前に刈り取りましょう。事前に用意する際は濡れた新聞紙にくるんで冷蔵庫に入れておきます。
すり鉢	葉をミキサーで細かくしても良いですが、葉をすり鉢でするのは楽しい体験です。
染め布	藍染め用に用意します。生藍は絹しかきれいに染まりません。木綿は染まりにくい上、色がすぐあせてしまいますが、両方用意して比べてみましょう。
こし布	すり鉢やミキサーでこまかくなった藍の液を、こし布でこします。染め液につける前に、水にぬらしておきます。
ゴム手袋	藍の色が手につきますと、1週間は色が抜けません すり鉢を使う際は絶対必要になります。
ボール	すった藍の葉の液をいれます。
氷	藍の液をひやすことにより、酸化を遅らせます。1すり鉢に2～3個入れます。

## 2. 藍の生葉染め

- ① 枝から葉を取ります。(茎の上部からひっぱるようにしごとと早く取れます。)
- ② 生葉を手ひとつかみ分をすり鉢に入れます。
- ③ 生葉はすり鉢に押しつけるようにしてすりませます。ここに氷を2個程度入れます。
- ④ 葉脈もしっかりすりつぶします。
- ⑤ 染め液ができたなら、こし布でこします。
- ⑥ こした染め液に布を入れます。
- ⑦ 布はボールの中でよく広げながら染め液に何度もくぐらせます。
- ⑧ くぐらせながら、空気に触れさせることで酸化します。



- ⑨ 布をよく絞り、水で洗います。(氷水で洗うとよく色がでる)日陰干しをします。
- ⑩ 日陰干しをします。

生葉染めの楽しい点は緑色の染め液に浸した布が、酸化によって「青」色に変化することです。この生葉色が日本では「はなだ色」と言われ、昔は貴重な色でした。外国では「インディゴブルー」と呼んでいます。



### 【工夫・留意点】

- 染め液は空気に触れると酸化を始めますので、手早く行ってください。
- 藍染めがきれいに染まるのは絹ですが、綿を染めるにはどうしたらよいか調べましょう。調べたら実験するのもよいでしょう。→木綿や麻などの植物繊維は染まりにくいので、牛乳や豆汁(大豆を水に浸し、すりつぶしてこした汁)などで処理してから染めます。

### 【応用・発展】

- 「はなだ色」は生葉が取れる時期にしかできない染め方法でしたが、「すくも」という技術ができるようになって藍染めが盛んになりました。昔の人々の知恵を学びます。  
\* 「すくも」ができるようになって木綿が簡単染められるようになりました。
- 「青は藍よりいでて、藍より青し」、「紺屋の白袴」などことわざがあります。それも調べてみましょう。(紺屋は藍染め専門の染め物屋さんでした。そのうち染め物屋全体をさすようになりしました。)
- 日本の藍染めの歴史を調べると、日本人と藍の関係が分かります。「伝統文化」を言葉だけでなく感じとってもらいます。
- 染めた布は「かんたん織物」でコースターをつくりましょう。  
\* 「かんたん織物の作り方」は自然－1綿の頁を参照



### 【参考 等】

- \* このプログラムは「宇都宮大学教育学部被服・生活情報学研究室」の協力のもとで、エコ・ハウスにて行われました。研究室では下記のような研究会も開催しています。  
研究会「繊維が結ぶ里山文化」  
HP : <http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satoyama/>  
また、体験授業等に協力いただけますので、ご相談ください。
- \* 参考資料:アイの絵本(農文協)  
高根沢中央図書館には「藍染め」や「草木染め」の本がいろいろ揃えられています。
- \* エコ・ハウス産の藍の種をお分けいたします。
- \* 染色試験布は、「中尾フィルター工業」で購入できます。06-6372-2043